

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K04669

研究課題名(和文)「多様な言語材」を学習者自身が作ることを大切にした国語科授業開発に関する研究

研究課題名(英文)A Study of Various Language Products for Japanese Learning Materials

研究代表者

森田 真吾 (MORITA, Shingo)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：10361403

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は新聞やチラシ・ポスターなど、日常生活の中に存在している「多様な言語材」の国語科指導における学習材としての価値を積極的に認め、それを活かした国語科指導モデルのあり方を究明することを目的としている。とりわけ学習者自身が「作る」という活動の意義を認め、その指導のあり方を究明することとした。

その結果、指導を構想するにあたっては、学習者の身の回りに存在する言葉そのものに対する省察を確かなものにするを出発点とし、ただ単に作るだけの活動にならないようにするために制作する言語材に対して目的意識や相手意識などをずらして内容にアレンジを加えることを重視して指導を行うことの有効性が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、平成20年に改訂された学習指導要領において重視されるようになった「言語活動の充実」や「実生活に生きてはたらく言葉の力」の育成を国語科指導の中でどのように実現すべきかを究明するために行われたものである。単に教室の中でのみの指導に留まらない、日常生活における言語活動にまで踏み込んだ指導を目指した点に意義を認めることができるが、研究によって明らかとなった授業構想のポイントである「自覚」と「アレンジ」は、学区集活動を学習者個人の言語活動レベルに留めることなく、それぞれの言語活動の複合体である動的な言語環境の整備にも繋がっていくものとして社会的にも意義の追究にも派生するものと評価できる。

研究成果の概要(英文)：In this research, we positively recognized the value of "various language materials" that exist in daily life, such as newspapers, leaflets, and posters, as learning materials in Japanese language instruction, and made use of them as a Japanese language instruction model. In particular, we verified the effectiveness of adopting the activity of "making" language materials by the learners themselves in the learning of Japanese language. As a result, when envisioning instruction, the starting point is to ensure reflection on the words that exist around the learner, and the language material that is created so that it is not just an activity to create. It became clear that it is effective to give guidance with an emphasis on adding arrangements to the content by shifting the sense of purpose and the sense of the other party.

研究分野：国語教育学

キーワード：国語科教育 学習材論 多様な言語材 作る 自覚する アレンジする 言語環境づくり

1. 研究開始当初の背景

本研究は、新聞やチラシ・ポスターなど、日常生活の中に存在している「多様な言語材」(情報の送り手による明確な目的意識と相手意識との相関によって多様な様式や体裁をとる言語による制作物)の国語科指導における学習材としての価値を積極的に認め、それを活かした国語科指導のあり方を明らかにすることを目的とする。その研究開始当初の背景をまとめると以下の通りである。

平成20年に学習指導要領が改訂され、国語科指導においては「言語活動の充実」や「実生活に生きてはたらく言葉の力」の育成が重要視されるようになった。それを実現させるためのポイントの一つが、これまでの教科書教材(説明的文章や文学的文章)を用いた指導に加え、日常生活の中に存在する多様な言語材を国語科指導の中に活かしていこうとする点にある。平成19年度から実施されている「全国・学力学習状況調査」の調査問題の中にも、新聞やチラシ・ポスターなどさまざまな言語材が取り上げられているが、それも多様な言語材を国語科指導の学習材として重視していこうとする姿勢のあらわれであると考えられる。その後、平成29年に学習指導要領は改訂されることとなるが、ここで求められている「主体的・対話的で深い学び」を実現させるために(とりわけ「主体的な学び」を保障するために)、多様な言語材の国語科指導における学習材としての意義の追究は、より積極的に推し進めなければならない状況になったと考えられる。多様な言語材への注目は依然として高いといえる。

なお当然のことながら、多様な言語材の国語科指導における学習材としての意義の追究は、これまでの国語科教育研究の中でも多くの蓄積がなされてきた。昭和期の終戦間もない時期に、国語科教科書以外の多様な言語材の学習材としての価値にいち早く気づいていたのが大村はまである。大村の行った新聞や雑誌を材料として学習者一人一人に学習課題を与えて展開された実践は、多様な言語材を用いた国語科指導の嚆矢であったと位置づけることができる。また東京都中学校青年国語研究会の活動を通して、大村はまとともに国語科単元学習の進展に力を尽くしてきた安居総子も、国語科指導における学習材を学習者に応じて可変的に捉えることを重視しつつ、自身で行った実践の中で新聞・テレビ・ラジオ・辞典・かるた等の言葉を積極的に授業の中に採り入れようとしている(安居総子『授業づくりの構造』大修館書店,1996)。近年においては、町田守弘は現在の学校教育の有様や学習者の実情に鑑み、とりわけ国語科の指導内容が子どもたちの日常と乖離してしまっている状況を危惧し、漫画・アニメーション・音楽・映像などのサブカルチャーに積極的な教材価値を見出そうとしている(町田守弘『国語科の教材・授業開発論』東洋館出版社,2009)。

こうした多様な言語材をめぐる先行実践・先行研究のうち、本研究で特に重視したのが、日常生活における多様な言語材を「機能的・実態的教材」として捉えようとする桑原隆の考え方である。桑原は国語科指導における教材を、「A.言語文化財としての教材」「B.機能的・実態的教材」「C.言語環境としての教材」に分け、教科書に掲載されている文学的文章や説明的文章など、すでに言語文化財としての価値を持っている教材(A)と、国語の授業には直接かかわらないが、日常生活の中で学習者の言葉に影響を与えているもの(C)との間をつなぐものとして、「機能的・実態的教材」を「国語教育のある具体的な目標の下においてはじめて教材としての価値を発揮するもの(例:児童が書いた作文、新聞やパンフレット、辞典・事典、本の帯など)」を定位している(桑原隆『言語生活者を育てる』東洋館出版社,1996)。「機能的・実態的教材」に含まれる言語材をうまく活用するならば、教師のみならず学習者の創意工夫や言葉そのものをうまく国語科授業の中に取り込むことを可能とし、ひいては「文化財としての教材」と「言語環境としての教材」とをゆるやかに切り結んだ国語科授業の実現を図ることができると考えた。そして、その実現にあたってポイントとなるのが、単に「機能的・実態的教材」を受動的にそのまま授業に採り入れるのではなく、学習者自身が「作る」という発想である。

以上の研究背景ならびに問題意識に照らし、本研究においては、多様な言語材をただ単に「あるもの」として指導に位置づけるのではなく、学習者自身の言葉を取り込み発展させるものとして、多様な言語材を「作る」という活動の国語科指導における意義を認め、その指導のあり方を究明することとした。

2. 研究の目的

以上の背景をふまえ、本研究で明らかにしようとしたのは以下の3点である。

- (1) まず一点目は、現在の国語科指導において多様な言語材を活かそうとする取り組みがどのように行われようとしているのか、そして、そこにはどのような問題点が含まれているのかという点である。先行実践や主張の蓄積によって国語科における学習材として多様な言語材への注目は高まっているが、それがどのような範囲・系統性を有しながら指導されているのかといったことについては整理が行われていない。その整理を行うとともに、指導上の課

題を明らかにすることを目指した。

- (2) 二点目は、多様な言語材を学習者自身が「作る」ということを活動の中心に据えて国語科授業を展開しようとする際におさえておくべきポイントをどのようにおさえるべきかを明らかにする点である。「作る」ということ自体を目的化することなく、国語科の特性をおさえた指導のあり方を模索するべきであると考えた。
- (3) そして三点目は、実際に多様な言語材を学習者自身が作ることを念頭に置いた指導の具体化ならびに検証である。先に挙げた をふまえた国語科指導を行う場合、その指導上の意義はどのように見出すことができるのかという点を試行的な授業・取り組みを行うことによって検証する必要があると考えた。

3. 研究の方法

上記を明らかにするためにとった研究の方法は、それぞれ次のようになる。

まず、(1)については大きく二つに分けて研究を進めることにした。一つは国語科教科書の分析である。現在、小学校・中学校で使用されている国語科教科書(小学校:光村図書・東京書籍・教育出版・学校図書、中学校:光村図書・東京書籍・教育出版・三省堂)における主に読むことならびに書くことの単元において、どのような言語材はどのような学習活動の中に位置づけられているのかについてそれぞれ整理し、その範囲・系統性について整理するとともに課題を明らかにすることを目指した。そして二つ目は実践分析である。日本国語教育学会の機関誌である『月刊国語教育研究』を中心として、そこに掲載されている多様な言語材を活かした国語科指導につき、最近10年分の実践の蓄積を整理し、どのような指導目標が設定されどのような学習活動が行われようとしているのかについて検討を行い、実践上の課題を明らかにすることを試みた。

次に(2)については、自身の勤務校に所属する大学生において、指導学生にさまざまな言語材を作成してもらうとともにその経験を活かして国語科指導を行うとどうなるのかという点について協議を重ねた。その協議内容ならびに学生の作成した言語材を検討することによって、国語科指導において多様な言語材を学習者自身が作成することを真に活かすための手立て・方策に対しての示唆を得ることを目指した。

そして(3)については、(2)で明らかにしたポイントをふまえ、小学校での検証授業と学部における地域イベントにおける活動を計画し実践を行うこととした。小学校の実践については山梨大学教育学部附属小学校の石川和彦教諭に協力を仰ぎつつ実施し、地域イベントにおける活動としては、勤務大学が主催する「子どもまつり」の場を活用することとした。

4. 研究成果

本研究を行うことによって得られた研究成果を以下にまとめる。

まず、教科書分析ならびに先行実践分析によって得られた成果についてであるが、教科書の中には各学年にわたって多様な言語材を教材の中に活かそうとする試みは多く行われるようになっており、「作る」ということが学習活動の中心となっているものも見られるようになっていくことが明らかとなった。しかし、それらの実践のなかには言語材の特性に応じて行われているようには見えないものや、「作る」ことそのものが目的化されてしまった実践などが散見されるという問題点も見えてきた。たとえば、「本の帯」を作るといった活動は、学習者に小説や物語などを要約する力をつけるために行われることが多い。そのねらいはけっして否定されるものではないが、「本の帯」の本来の機能は、読者の読書意欲を喚起し、実際に本を手にとってもらう点にある。そのような機能を十分に活かしつつ、実際の言語生活の中で自らが紡ぎ出した言葉の共有を目指して指導できるような手立てを今後は講じていく必要があるという点が指摘できた。また、「作る」ことそのものが目的化されてしまった実践については、作っておしまいということになってしまうので、活動そのものに対して意欲喚起することが非常に難しい。

それでは以上の問題点に対して、多様な言語材を学習者自身が作ることを中心に据えた学習活動をどう展開していくべきか。本研究によって明らかになった指導上のポイントをまとめると次のようになる。

まず一点目は、活動の冒頭において日常生活において存在するさまざまな言語材やそこで使用されている言葉に対しての「自覚」を促すという活動を組み込むという点である。日常生活の中で何気なく目にする言葉というものが何らかの目的意識や相手意識を有して使用されているということ意識させたいとすることで言語材の作成を行わせることが有効である。実際の検証授業においてもこうした活動を行うことによって、学習者は日常生活の中に存在するさまざまな言葉の存在に気づき、その気づきを他者と積極的に共有しようとする姿勢を養うことができる点が見明らかとなった。

そして二点目は、多様な言語材をそのまま作るというのではなく、目的意識や相手意識に照らして、作る言語材に対して何らかのアレンジを加えることが重要であるという点である。日常生活の中に存在する言語材について、目的意識や相手意識をそのまま保持しつつ学習活動を展開

することは難しい。たとえばレストランのメニューは、店長（シェフ）が自身の作った料理を知らせ、注文してもらうために言葉や写真等を組み合わせで作成されるものである。どのような言葉で対象の魅力を伝えることができるかを考えさせる格好の学習材となりうるが、専門的な知識のないままにそれをそのまま取り組ませるだけでは学習活動は充実しない。そこで注目したのが「アレンジを加える」ということである。メニューに掲載される対象を「料理」ではなく「本」にするならば、日常生活のなかに存在する実際のメニューを参考にしつつ（そこで使われている言葉に自覚的になりながら）、自らの読書経験と照らして「本のメニュー」を作成することができる。そしてそうしたアレンジを加えられたものというのは現在の生活の中には存在しないものを創り出すという楽しみも一種含まれている。そのような楽しみを活動のモチベーションにしつつ学習活動を展開することが可能であるという点が明らかとなった。そしてさらにいうのであれば、本研究においては、こうした活動によって作成された言語材（アレンジが加えられた言語材）を実際に使用し交流する場を整えるということも行ったが、その結果明らかとなったのは、アレンジを加えた言語材を使用して交流する場を整えるということは、そこで交流する人々の関係性をも改変する可能性を含んでおり、新たな言語環境を創出する可能性を拓くものであるという点が指摘できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森田真吾	4. 巻 557
2. 論文標題 「主体的・対話的で深い学び」を目指した「自己内対話」への他者視点の導入	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『月刊国語教育研究』	6. 最初と最後の頁 pp.28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾七重、寺井正憲、森田真吾、辻山洋介、大島竜午、物井尚子、高橋浩之、松崎洋子、砂上史子	4. 巻 第66巻 第1号
2. 論文標題 教科指導におけるICT活用の具体化：各教科等の特徴を生かして	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.149-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北島善夫、寺井正憲、森田真吾、戸田善治、松尾七重、辻山洋介、大島竜午、西垣知佳子、物井尚子、高橋浩之、砂上史子	4. 巻 第66巻 第1号
2. 論文標題 教科指導におけるインクルーシブ教育：各教科等の特長を生かした指導の具体化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.169-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田真吾	4. 巻 No.547
2. 論文標題 他教科を視野に入れることによって得られる国語科指導の「真正性」について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 p.46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田真吾	4. 巻 No.809
2. 論文標題 小学校段階で育成を目指す資質・能力と「主体的・対話的で深い学び」の実現のポイント	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育科学国語教育	6. 最初と最後の頁 pp.16-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田真吾	4. 巻 第87集
2. 論文標題 昭和10年文法教育における指導内容の「収斂」 - 文部省『中等文法』の独自性について -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『国語科教育』（全国大学国語教育学会編）	6. 最初と最後の頁 pp.50-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 森田真吾
2. 発表標題 様々な言語材を作ること（ワークショップ）
3. 学会等名 千葉大学国語科教育の会 第41回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森田真吾
2. 発表標題 言語生活を拓く様々な言語材づくりについて（ワークショップ）
3. 学会等名 千葉大学 深い学びを実現する国語科授業研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森田真吾
2. 発表標題 国語の教科書を読み直す
3. 学会等名 千葉県立千葉北高校出張模擬講義（オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森田真吾
2. 発表標題 近代日本における日本語文法研究と文法教育
3. 学会等名 国際研究会「次世代の日本研究－国際的協働研究と研究交流－」（オンライン）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 全国大学国語教育学会編 飯田和明・坂口京子・山元隆春・森美智代・松崎正治・間瀬茂夫・舟橋秀晃・宮本浩治・中村敦雄・本橋幸康・中井悠加・伊木洋・藤原顕・吉田茂樹・信木伸一・桃原千英子・富山哲也・安部朋世・山下直・森田真吾（他39名）著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 266ページ
3. 書名 『新たな時代の学びを創る中学校高等学校国語科教育研究』	

1. 著者名 田近洵一・北原保雄・今村久二・青木伸生・井上典子・井上陽童・井上善弘・岩崎淳・岩永正史・植山俊宏・奥村千絵・長田友紀・春日由香・樺山敏郎・河内昭浩・喜戸紀彦・木下ひさし・ロバート キャンベル・幸田国広・児玉正・坂本喜代子・佐藤宗子・佐野比呂己・佐野幹・汐見稔幸・丹藤博文・鶴巻景子・中村和弘・西 研・森田真吾（その他13名）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 教育出版	5. 総ページ数 1956ページ
3. 書名 ひろがる言葉 1上～6下	

1. 著者名 森田真吾	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科（博士論文）	5. 総ページ数 298ページ
3. 書名 「学校文法」成立過程における指導内容の生成と収斂	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>学部授業内におけるワークショップの実施（「読書紹介パンフレットの作成ならびにその活用」・「物語創作に焦点を当てた文集づくりによる虚構世界の共有」）（2020） 報告書「「多様な言語材」を学習者自身が作ることを大切にした国語科授業開発に関する研究」（千葉大学教育学部森田研究室・私家版）の作成（2021）</p>
--

6. 研究組織		
氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------